

〔定家型付〕

△定家 位序々ノ序

一 此能ハ、哀傷之中の哀傷にて、冬の能なれば、亡魂夢まぼろしと成て、ふぢ衣なるふう躰也。物さびしく、あはれにしなし、音聲・息ざしもあぢさなく舞なす事、習の根本也。

一 脇は上り僧にて、うつほ僧とて、只一人也。遠き旅より来るといへども、出世を望む僧なれば、出立もきれひにして、音聲もさハやか成べし。

一 太夫、初の面ハふかい・ぞう。お、ひかづら、かづら帯。小袖ハ唐織なるべし。時雨の亭をおしへむため出たる太夫なれば珠数ハよろしからずと云説侍れ共、「今日ハ心ざす日にあたり」「墓所へ参る」など、云文句あれば、かたぐ以て珠数持べしと、古人もいひし例あり。△扱、後の出立は、面女霊、お、ひかづら、かづら帯。天冠の光りを捨て臺ばかりを着てもよし。又何もきぬもよし。長絹、或ハぬぎかけもよし。紅の袴ハ我家にハ不用也。かづらにとぢられたる姿をまぬれば、袴ハ身ひろにて、仕舞成がたし。

一 此能に姥がミをかける事あり。それハ、大事を不_レ残するぞとの約束のしるし也。只無_二別義_一。常の定家にハ、黒きお、ひかづら迄也。

一 作り物ハ常のごとく四角也。つたかづらを上に作りかけ、引まハしをして、初より出し、常の所に置也。後、太夫入て、腰掛て居時に、両方の肩^ニかゝる位にかづらを一筋づゝ、上よりさがらかし侍る也。略してハ上ノつたかづらの代に、もえぎの^ハかづら帯を二筋、太夫の乳のあたり迄さげる也。此作物の中へ、後に入候^ハ面^ハ装束、或ハ^ハ姥がミなども、用意して入置候。扱^ハ引まハしをとる時分ハ、△「夢もうつゝもまぼろしも」と云時にとる事也。

一 次第にて脇出る也。真之五段之次第打也。二段打切て、三段目に、小鼓ぽぽぽと三つ打事あり。其跡^ニやがて出頭を打也。此時幕上させ出てよし。

一 扱、常のごとく大鼓の方へ次第につく也。謡出すに、大夫大事を不^レ残する時は、鼓も^ハ下略之頭を打事、定り也。^ハ下略之頭とハ、鼓の大事にて、先^ハ本之頭と号、上略・中略・下略とて、脇の不^レ出前には是を打。扱わき出て次第をうたふ時、打切て謡ひ出す時、右之本之頭を^ハ上と^ハ中と二つハ打て、^ハ下之所を略して、かけ聲一つにて謡ひ出す事にて候。よくたんれん有べし。

一 扱、地をとる内に正面向て名乗候に、^ハふミとむる脇、^ハたちどまる脇と云習あり。^ハ踏留^ル脇ハ、住所の僧、或ハ名有僧、或ハおもふ所にしかと着たる僧などハ、太夫の足のごとく、前後しめて、引すハリ立也。^ハ不^レ踏不^レ留^ハ立留る脇ハ、諸國一見修行の僧にて、末久敷心ざす内なれば、一所に不^レ住、行が、りに立どまりたる計の義也。^ハ此脇ハ、上り僧とて、都に心ざし、

都に着たれば、しかとふミ留る事也。奥々之秘事之習也。

一「着にけり」と云時に、〽本着と云と〽半着と云習あり。謡の文句迄にて、道行を謡ひおさむるハ、〽半着とて、地謡の□(方)へ向ひ着。〽「都に着にけり」と云ハ勿論之事、其外、何れも其國・其所・其里に着にけりと云ハ、皆〽本着とて、鼓の方に着也。〽此習ハ太夫かたも〽脇かたも同事之定り也。

一〽亭の有所、〽左りの目付の折目通り也。然共、太夫とよく云合有べし。此目付、太夫と相違しぬれば、両の見る所各別にして、おかしき物に成侍り。

脇 大鼓の方へ向て

〽山より出る北時雨、山より出る北しぐれ、行末や定めなかるらん 地をとる内_二正面向 是ハ北國がたより出たる

僧にて候、我未都を見ず候程に、只今都へ上り候 答拜ス 冬立や、旅の衣のあさまだき、く、雲も行

かふ遠近の、山又やまを越過て、紅葉に残る眺まで、花の都に着にけり、く 右へ少出て 本つきにつく也

漸急候程に、是ハ上京とかや申候、心静に一見せばやと思ひ候 と云て、左りの折目さきへ 又正面向 出て_〽「面白や」と謡出す

面白や比は神無月十日あまり、木々の梢も冬枯て、枝に残りの紅葉の色、所々の有様までも、都のけしきハ一入の、眺めことなる夕かな、や、時雨がふり来り候、是成やどりに立寄、時雨を晴

さバやと思ひ候 と云て、又少行やうにする也

なふく其やどりには何とて立よらせたまふぞ 脇 右へ立かへり太夫を見る さん候、唯今の時雨に立寄て候、扱此所をば

いか成所と申候ぞ 太夫 是ハ時雨の亭とてよし有所也、其心をもしろしめして立よらせたまふかと、
脇を見 思へばかやうに申候 わき 実々是成額を見れば時雨の亭とか、れたり、折から面しろふ候、扱又初の目是ハ
付所を見るもよし いか成人の立置せ給へる所にて候ぞ 太夫 是ハ藤原の定家の卿の立置せ給へる所也、都の内とハ
 申ながら心すごく、時雨物哀なればとて此亭を立置、目付所を見上 年々哥をも詠じさせ給ひしと也、古跡とい
 ひ折からといひ、逆縁の法をも説給ひて、彼御菩提をもお吊ひあれと、す、め参らせん其為に委
 をしへ申也 わき 扱ハ藤原のさだ家の卿の立置せ給へる所かや、扱さて時雨を留る宿の、歌太夫を見るハい
 づれの言の葉哉らん 太夫 いやいづれとも定めなき、時雨の比のとしぐなれば、わきてそれと
 ハ申がたし去ながら、時雨時を知と云心を、偽りのなき世なりけり神無月、たがまことより時雨
 そめけん、其ことがきに私の家にてとか、れたれば、若わきを見る此哥をや申べき わき 実哀なる言の葉かな、
 さしも時雨ハ偽りの、なき世に残る跡ながら 太夫 人ハあだ成古事を、語わきを見るれば今もかりの世に
脇 他生の縁ハ朽もせぬ、是ぞ一樹の陰のやどり 是よりつめ合也 一河の流を汲てだに わき 心をしれと 太夫 折よる足か
しづかに正面向 らに、今降も、宿は昔の時雨にて、く、心すみにし其人の、哀をしるも夢の世の、実定引てなや定
目付を見上 家の、軒目付を見上ばの夕時雨、ふるきにかへる涙かな、庭左りへ廻もまがきもそれとなく、荒のミまさる草むらの、
正面引とり、少見上 露のやどりもかれぐに、物正面引とり、少見上すごき夕部なりけり、く 太夫 お僧わきを見るに申べき事の候、けふは心ざ
 す日に当りて候程に墓所へ参り候、そと御参候へ 脇 それこそ出家の望む所にて候へ、さらば御

供申候べし右足より少足遣ひして左り向て作物を見て「なふく」と謡出す

一「語りの間さしたる事なし。太夫も脇も少づ、如^二文句^一余情ある迄也。然^ル間、謡を書略^ス。

一「大略にする能の時ハ、^ハ「此御墓にはひまとひ」と作り物を見て、●「猶々語りまいらせ候ハん」と脇を見る迄也。其後、くり・さし別之事なく、●「後の心ぞはてしもなき」と脇を見る内^ニ常の所にとゞする事也。然る間、脇も●「忘ぬ物を」と、くりの内より本座へ行、なをる。

一「大事之習をする能にハ、●「此御墓にはひまとひ」と作り物を見て、●「御経をよミ吊ひ給ハ」^ハと脇を見て、●「猶々語り参らせ候ハん」と作り物をおがミ、則とゞする。是を^ハ墓めぐりと号。脇も少あゆミ寄て、作り物をおがミとゞする。是を引導と号、脇方の大事也。鼓も爰に大事之習のはやし有。扱其後、太夫も脇も立て、脇ハ本座になをり、太夫ハ常ノ破所に正面向、なをる。此間謡ハなし。太夫も脇もなをりたるを見て、鼓則^ハくりりに打替る。此時地より^ハ「わすれぬ物を」とくりをうたひ出す事也。

一「くり^ハさし^ハ曲舞ハ、少づ、余情あるまでにて、別の事無^レ之間、書略^ス。●「はてしもなし」とわきを見る也。●「あはれしれ」より正面向。●「色に出けるぞかなしき」となく事、本理の仕舞にて候。したるきと思ひ、なき侍らねば、色に出たる専なし。●「此御跡に」と作

り物の方へ面を遣ふ。●「妄執を助給へや」と脇を見る。●「我こそ」と立て、●「是まで見え来れ共」と脇を見て、●「真の姿ハ」と右へまはり、見付の柱をうしろになる様に引て、作り物を●「石にのこすかたち」と見る事也。扱、常の仕舞の時は、●「それ共見えぬつたかづら」と大鼓の前へ行て、●「扶けたまへ」と引て、脇を見て、扱作り物へ入侍り。

一「大事をする時の仕舞ハ、〱「石に残すかたち」と云時、作り物によりかゝり、●「くるしミを扶給へ」と脇を見て、扱入事にて侍る也。是を〱影の姿と号。大小之鼓もよりかゝりと云大事をうち、〱笛もよりかゝりと云手を吹也。是則、後ニ〱ひぼときをするぞとのしらせの仕舞也。

一「六道のはやしをするぞとの笛・鼓より太夫へしらせの約束ハ、●「賀茂のいつきの宮にしも」と云時、吹かけ、打掛る手あり。

一「定家の大事、脇方にハ、一者上り僧、二者下略之頭、三者本着、四者亭ノ目付、五者引導。

〱太夫方之大事ハ、一者墓廻、二者影ノ姿、三者夢かとよ、四者五輪碎、五者露のひぼとき、六者袖かぐら、七者六同ノ足、八者輪廻、九者兼留。

如レ此習あるゆへ、〱九品之習と号。〱定家〱楊貴妃〱大原御幸、此三番を〱三婦人の能とて、

一大事の習とハいへども、中にも〱定家ハ諸能之中の大事随一とせり。笛・鼓ハ、右之習悉ク

しらでハ不^レ成事に侍り。猶委細之奥^(老)に書頭者也。

一^ハ脇、あひの謡の間に呉様なる事なければ、謡之段書略^ス。

一^ハ鼓に^ハ山あひの習とて一大事の秘事あり。^ハ山あひは^ハ山姥にも侍れ共、^ハ定家を殊^ニ大事とす。

●「吊ふ法ぞまことなる、^{爰也}く、此返しの終の●「となる」と云三字の内、とノ字のゆりのふしの内より鼓打出し申候。此ゆへに、^ハ山あひ共^ハ三字かけ共号也。^ハ笛もひしがぬ物にて候。笛をひしぎ、一せいのやうに鼓を打事ハ、一圓物をしらぬにて候。^ハ夕顔の山のは、^ハ定家の^ハ夢かたととて、^ハうつにもあらず^ハうたぬにもあらずと、是習の秘事にせり。只ほのぐと打かけて、ほのぐと太夫に謡出さする事、専也。

^{太夫}^ハ夢かたとよ、闇のうつ、のうつ山、月にもたどる蘿のほそミち

^ハ大小鼓こひ合の内、^ハ小鼓の間よりいかにもほのぐと^ハうたふ事也。

^{太夫}^{爰よりしかとうたふ}^ハ昔ハ松風蘿月に詞をかハし、翠帳紅閨に枕を双^{わき}さまぐ成し情の末^{太夫}花も紅葉も散々

に^{わき}旦の雲^{太夫}夕の雨と^地ふることも今の身も、^{爰より引まハしをとる也。太夫はこしかけていかにもく^{なるほど}肩も身も足}夢も現もまぼろしも、共に無常の、世と成

て跡も残らず、何なか^くの草の陰、さらば葎の宿ならで、そとはつれなき定家かづら、是見給

へや御僧^{太夫を脇見やる}あら痛ハしの御有様やな、あら痛ハしや、^{又つくばひおがミ}佛平等説女一味雨、随衆生性所受不同

^{脇ハ立て}

太夫 御覽ぜよ身ハあだ浪の立居だに、なき跡迄もくるしびの、定家かづらに身をとぢられて、か、
もとの座になをる

るくるしミ隙なき処に、有難や、唯今讀誦し給ふは薬草喻品よなふ 太夫の方を脇見やる也 わき 中々なれや此妙典に、

もる、草木もあらざれば、執心のかづらをかけはなれて、佛道ならせ給ふべし 太夫 あら有難や

実もく、是ぞ妙なる法の心 わき あまねき露の恵を受けて 太夫 二もなく わき 三もなき 地 一味の

御法の雨のしたゞり、ミなうるほひて草木国土、悉皆成佛のきをえぬれば、定家かづらもかゝる 左りにかゝりたるかづらを見、又右ニ

涙も、ほろくくとけひろければ△太夫爰より立也 かゝりたるを見上 鼓爰より位をとりて、次第くにしづめる也 両手にて左右へかづらをのける仕舞也

一 〽五倫碎之事、●「一味の御法」より急にはやく、〽「草木国土」より猶はやく、位を背く

計に吉。〽「きをえぬれば」より拍子にかゝ、はらぬほどはやく、〽「かゝる涙も」と位も拍

子も不レ入はやくうたひ、はやくはやしたるを、手がらにする事也。〽「とけひろければ」

より位をとり、次第くにしづめる事也。謡も鼓もへたハ難レ成所にて候。扱、

一 〽五倫碎とハ、〽五躰・五倫を表して頭五つ打也。先常ノ打込之頭ハ、ハ▲ ヤアツ エイ

イヤツヲ ハ▲ イヤツ、〽如レ此に六つ打事なるを、内を一つ捨て五つ打事也。

一 〽先鼓に五拍子とて常の地拍子ある事ニ候。此五拍子を、位を捨、打くだきはやむるに依て

〽五倫碎と号ス。加様之秘事、家之大事なれば、聊他人に語る事なし。可レ有ニ秘密一者也。

作り物より出る也。大小も謡もなるほど真にはやすべし。静也 わきをおがむ よろくと足弱車の、火宅を出たる有難さよ、此報恩にいざらば、有し雲井の花の袖、昔を今に おがミたる手を引て

かへすなる、爰より大小、猶々位真にはやす。へいせいにあらず。色えにあらず其舞姫のをミ衣、おもなの舞の、有様やな△爰に五段之舞あり。大概ノ能の時ハ、右へ廻、序所へ行

大事をする能の時ハ、●「おみごろも」と扇をひらき、左手へとりて、●「おもなの舞」と扇にて顔をかくし、其間に舞臺真中へ出て、長絹のひぼをとき、扱左りへ小廻りをする内ニ、ひぼの露を両の手に持て、大鼓の方へ向て、たつぱい三つする也。是則へ袖かぐらと号。小鼓此時にへぷつぽくと、のつとを打也。扱常の序所にかへる内ニ、扇をもたゝミ、両の露をこし帯の前にはさむ。爰までノ間ハ、へ笛ねとりの様にふき、へ鼓も序のごとくにハウたぬ也。扱太夫序所にて常のごとく正面むき、露もはさミ仕廻て、序をふまんと足をそろゆるを見て、へ笛へ鼓序にかゝる事也。

一へ夫序ハ、●常の序、●序ノ序、●ミだれ序、●本ノ序、●真之序とて、さまざま替り侍りて、其上^ニて又へ悠序、へ序々、へ破序、へ急序、へ草序とて、五品の習あり。此定家ハへ悠序ノ位にはやす。但、大事をせざる時ハ、破がゝりにしたる例もあり。それハ略義也。

一へ扱、序に成て、笛ハへかんのかゝりに吹物なるゆへ、則かんのかゝりの約束の序をふき出す也。太夫も則序をふミ出す事也。

一へかんのかゝりハ、序の吹出しにかんの音有。

●上ほひゃあ らあ りんやらあ りやあら 下ひようい と吹也。是かんに吹ぞとの笛のへ案

内の手也。此跡ハ常の序にて常のごとくおろしも吹て、おろしの跡に^レ序ノ序と云て、呂の音にて又、●^下ひよう らあらゝろ と吹也。此跡に^レすミの拍子を吹ク。太夫も^レすミの拍子を右へふミ越、其次かんの常の舞を吹。

此間太夫ハさゆふ^三引
しほる 引 持 下
ひうやあ らあ 下ほう ほう ほう 小鼓ハおつを六つ
引 引

大鼓ハき^{（ぎ）}ミ六つ付る

△太夫の足、爰の大小の間よりふミ出して、拍子六つ

笛、爰より常の舞也
ひやつ ひようゐ ひやあるり

^レ如レ此、序の終に、笛も六つ、小鼓も六つ、大鼓も六つはやす事にて侍れば、^レ六同共云、^レ六道共書、十八有に依て^レ恠のはやし共云、十八点をかたどり^レ石塔共申也。太夫之拍子六つを加て、^レ廿四之はやし（共）の号。大事之習物にて候へば、ふかく可^レ有^二秘密^一者也。

●ト、トントント、ン ^レ太夫の拍子、如レ此ふむ也。

一^レ此五段之舞の終に、●「おもなの舞の」とうたふ内に、作り物を扇にてさすもあり、又ハおがミてうたふもあり。是を則^レりんゑの仕舞と号也。次^ニ此^レ和歌うたひ出し、拍子にむつかしく候。

●^笛ひやつ ひようゐ ひやあるり
爰よりうたひ出し合也。

りんぎの習 太夫

おもなの舞の、有様やな

地 右へ廻、して柱の本へ行

太夫

もはゆの、有様やな

太夫

もとより此身は 月の

うちこみ引て

顔ばせも

太夫 正面見やる

曇りがちに

地 うち出し右すみへ出る

桂のまゆずみも

太夫 すみとり左りへ廻ル

をちぶる□涙の 露と消ても、つたなや蘿

作り物を左りにてさし込、引さまニ

の葉の、葛城の神姿、恥かしやよしなや、よるの契りの、夢の内にと、有つる所に、かへるハ

右へ廻り

又作り物を見て

葛の葉の、もとのごとく、はひまとハるるや、定家かづら、はひまとハる、や、定家かづらの、

作り物の中へ入て、右のわきへ出てハ又柱を廻り中へ入、二返して

はかなくも、かたちハうづもれて、うせにけり

作り物の真中へとゞし、扇にて顔かくし留る。是をへかね留と号ス

右のごとくへ

かね留に太夫仕舞時ハ、太夫の又立て作り物より出る所を、謡より又謡返し、

●「うせにけり」とうたふ物也。へ鼓も又打返し打留ル。よの常に舞留る様子ハ、作り物を

二返柱をまはりて二返目ノ時にして柱のもとへ行、して柱の本、常の所にて舞留るもあり。

又、つくばひ、扇にて顔かくし留るもあり。是ハミなへかね留にてハ無レ之也。

右へかね留之習は、へ老松へ野守へ松山鏡へ定家、以上四番に相定ル。世に知人稀也。但観

世にハへ楊貴妃にもへかね留せり。

右之趣末代為ニ家之鏡「先祖善竹於レ是書記處也。雖レ為ニ一子相傳一年來御執心不レ浅所依レ難ニ黙

止、秘密不レ殘令ニ傳受ニ候。聊他見有間敷者也。

竹田七郎

秦氏勝判

年号月日

今春家之一子相傳右之趣也。余之珍事有_レ之者可_レ為_二僻事_一。不_レ可_レ有_二受用_一者也。

寬文^乙_巳曆

秋扇翁

正月吉日

照三(朱印影模写)(花押)

松井与兵衛殿_参